近代統計の起源

明治４年12月太政官正院に，はじめて政表課がおかれた。設置の要旨は「政表課史」にこう書かれている。「明治４年辛未官将サニ特命全権大使ヲ欧米諸国ニ差遣セントスルノ議アリ其ノ携帯ノ用ニ充ンガ為メニ六月八日権少史安川繁成ニ命ジテ日本政表及日本国勢要覧ヲ編集セシム，是レ政表事務ノ由テ起ル所ナリ」正確には６月８日が，総理府統計局のそもそもの発端の日であつたといえるかも知れない。また，この年の７月，廃藩置県と同時におこなわれた政府機構の改正で，大蔵省に租税寮および勧農・紙幣・戸籍・駅逓の４司とならんで統計司（８月に統計寮となる）が設けられた。統計司の仕事も統計を編成し，これを閲覧に供することであつた。日本が旧幕時代の名残りを清算して近代国家としての体制を確立したその年に，政府部内に統計を編成することを任務とする二つの機関が，ほとんど同時に生まれたわけである。

当時は，スタチスチックスの訳語は一定していなかつた。政表という用語は万延元年に福沢諭吉がオランダ人ブ・ア・デ・ヨングの原著を「万国政表」と訳したことにはじまるといわれるが，統計という訳語を用いたのは，統計司が最初の例であつたようだ。

いずれにしても統計機関の誕生は，近代日本の出発と時を同じくしていた。今からちようど90年まえのことである。　　――総理府統計局編　統計90年の歩みより――

写真は，36年11月，統計局開設90周年記念展示会の第１会場になつた電子計算機室（ＩＢＭ 705型 電子計算機室）である。

近代化と統計のあゆみ

総理府統計局長　小田原登志郎

本稿は，昭和36年12月6日茨城会館において行なわれた昭和36年度茨城県統計大会の席上，小田原総理府統計局長をお招きし，同氏の記念講演を速記したものであります。

茨城県統計大会に実は初めてお招きをいただきましてきようは親しく県下統計関係者の方々にお目にかかることができましたことを，大へんに嬉しく，ありがたく存じております。まずもつてこの席をお借りいたしまして平素来私ども中央統計部局の関係事業につきまして，第一線として非常な御尽瘁をいただいておりますことを，深く御礼を申し上げたいと存じます。とりわけ昨年の国勢調査に際しましては，おそらくは今日お集まりのすべての方々に，その持場々々において何かと御配意をいただいたことと存じます。この機会に厚く御礼を申し上げる次第でございます。

さて本日は誠に恵まれた天候のもとに，この盛んな昭和36年度の統計大会をお催しになりまして，県下の関係者の方々がこのように一堂に集まられ，大いに志気を高め，また親しく交歓を遂げられますことは誠に意義の深いことでありまして心からお喜びを申し上げます。とりわけきようは非常に数多くの方々につきまして，それぞれのこれまでの統計についての御労苦の御一端が酬いられまして各種の表彰をお受けになつたことであります。誠におめでとう存じます。私はこれらの方々を含めて，なおまたその背後にある数多くの統計関係者の方々の御労苦をこの機会にしのび，これらの方々に深く敬意を表し，今後ともお力添えをいただきますようにお願いを申し上げるものであります。

今日は私に何か話をいたすようにというお申しつけであります。実は最近いろいろと身辺とりまぎれておりまして，ゆつくり想をまとめるといつたような余裕があまりなかつたのでありますけれども，先般私はヨーロツパに開かれました国際統計会議に出席をいたして参りました。まあその旅行話あたりから何か申しあげまして，しばらくの時間申しつかりました責めをふさがしていただきたいと考える次第でございます。

ちようどこの8月の末から9月の初めにかけまして，正確に申しますと11日間にわたりまして，フランスのパリで国際統計協会の第33回総会というのが催されました。これはお聞き及びかと思いますけれども，昨年やはりこの国際統計協会の第32回の総会が東京で開かれております。この時には世界各国からほぼ250名ばかりの統計学者，統計局長といつた方々が集まられまして，わが皇太子殿下，同妃殿下も御臨席いただき，非常に華やかに，そして盛大にこの会議を催したことであります。ことしはこの会議がパリで開かれたわけであります。実はこの会議は大体1年置きに催されることになつておりますので，本来でありますと，去年に続いてことしあるというのは異例でありますが，これは実は去年東京でありました会議というのが，ほんとうは1昨年開催せられるはずであつたのであります。それが東京の準備の都合で去年に延びた，こういう関係がありまして，相次いで本年もこの会議が催されたというわけであります。

何さまパリといえばヨーロツパのまん中で大へん便利のいい都市でありますから，集まる人も多く，参加者は全体でほぼ500名に達しました。わが日本からは，私のほかに，先ほど祝辞をお述べになりました後藤統計基準局長と私がこの国際統計協会の政府職務会員ということになつておりまして，後藤さんも出席されました。なおこの国際統計協会のやはり副会長の1人であられました森田優三先生や，また同協会の会員であられる増山元三郎先生あるいは北川敏男先生といつたような方々が出られましたほかに中山伊知郎先生や，先ほど祝辞をお述べになりました東京都の山田部長も御出席になられ，けつきよく日本代表陣は全体で10名，これは今までの日本としての出席者数の中でもおそらくレコードであると思われるほどの人数でありました。

パリはまた花のパリ，花の都といわれておりますわけで，実はこの500人の参加者のなかにはそれぞれ奥さんや子供さんを連れている人が多かつたのであります。わが日本からは残念ながらそういうことはありませんでしたけれども，どうも各国の統計学者や，統計専門家の先生方の中には，こういう機会に奥さん孝行をしておこうこういうお気持の人が大分あつたようでありまして，パリでは一般参加者のほかに家族が300人も集まり，総勢で800人という大きな会議となりました。あまり多いので，レセプシヨンなどをするにも人数を制限しなければならないというようなことがあるくらい盛会でありました。

パリの凱旋門の近くにありますところの国際会議場でこの会議が催されたのでありますが，これが約20の部会これをサイエンテイフイツク・ミーテイングと申してお

りますが，20部会に分れまして，いろいろの問題，たとえば社会統計，すなわち人口統計であるとか経済統計であるとか，あるいは交通統計であるとか，あるいは産業統計であるとか，こういつた社会統計の部門，あるいはまた医学であるとか生物学であるとか物理学であるとかといつたような自然科学統計の分野，その両面にわたりまして，さらにはまた，その中でも理論的な分野，数理統計理論のような分野あるいは実務的な分野あるいは集計の技術，製表の技術といつたようなデータ・プロセツシヨンと申しておりますけれども，そういつたような問題，それぞれにつきまして，連日これだけの部会が並行して行なわれ，それぞれ報告が出されるのであります。日本からも諸先生からいくつかの報告が出されております。東京都の山田部長も「東京都の過大人口について」という御報告をなすつておられます。これに対していろいろと討議があり，質問がある，こういう形でその部会は進行をいたすのであります。

なおそのほかにも全体会議，これを総会といつておりますけれども，総会が開かれまして，いろいろ国際統計協会の運営上の相談があります。なかんずく役員の改選がありました。役員のことは皆さんにはあまり御興味はないかと思われますけれども，この役員は，会長が１人それから副会長が４人，それから事務総長が１人，会計監事が１人というわけで，国際統計協会の役員というのは全体で７名であります。この中で任期の来た方々数名につき，その改選が行われました。先ほど申しました森田優三先生はこれまで２期４年間にわたつてこの国際統計協会の副会長の１人であられたのですけれども，今回任期が来て勇退をされました。けつきよくどういう構成になつたかと申しますと，会長はボルドリーニというローマ大学の統計学の先生，それから副会長は４人，この第１はイギリスのキヤンピオンという，これは中央統計局長であります。それからドイツのフユルスト，これは連邦統計局長であります。それからアルゼンチンのデユルフエ，これは大学の先生であるそうであります。それといま１人，ソ連のリヤブースキンという学者が１人入りました。こういう国際機関では国連の本部におけると同じように，ソ連の問題はなかなかデリケートなのでありますが，従来いろいろ問題があつたのが，今回初めてソ連の人がこの国際統計協会の役員に入つた，こういうわけであります。このほか，たとえば事務総長になつたのはイーデンベルグといいまして，オランダの統計局長であります。それから森田先生に代つて東洋からはインドのラオという人が入りました。これは会計監事になられました。

開会式はパリのユネスコ本部の大ホールで行なわれました。開会式の印象は，こういうものとしては，極めて簡素なものであつたということにつきます。東京で昨年ありました時はＮＨＫの大ホールで，交響楽などが演奏され，皇太子殿下もおいでになつて，いわば鳴物入りで大へん華やかに幕を開けたのでありますけれども，パリでの今回の総会の開会式たるや，誠に簡素なものでありました。鳴物など一切ない，いきなりフランスの総理大臣のドウブレという人が立つて演説をする，それに続いて，先ほど申しました会長のボルドリーニが開会の演説をいたしました。その演説の冒頭に，彼はこのように申したのであります。

1885年における国際統計協会――これを略称いたしましてＩＳＩと申しております―1885年におけるＩＳＩの創立には２つの事件が結びついていた。その１つは，ロンドン王立統計協会の50年祭であり，いま１つは，パリ統計協会の25年祭であつた。」こう申したのであります。これはつまりこういうことであります。1885年と申しますというと，今からほぼ75年前でありますが，その年にロンドンで，イギリスの，今申しました王立統計協会――ロイヤル・スタテイステイカル・インステイテユートと申しますが，王立統計協会の50年の式典があつて，その際に政府が各国の統計家を招待いたしました際に，ウイーン大学の先生で，ノイマン・スパラートという人が，この際各国の統計の常設的な協力機関を作ろうではないか，こういう演説をいたしまして，ここで国際統計協会の規約の起草をいたしました。続いで同じ年に，パリでパリ統計協会の25年祭というのがありました際に，この草案の審議をいたしました。そしてここに国際統計協会というものが75年前にできたのであります。

この協会の目的というのは，各国におけるところの統計――行政統計あるいは科学統計の発達を助成していくことにあります。そしてその性格はいわゆる自主的な国際協会であり，私的なアカデミー，学術団体でありますと同時に，各国政府間の機関でもある，こういう性格をもつております。従つてこの国際統計協会の毎年の総会は開催国の政府がこれを招待する，こういうことが昔から行なわれておるのであります。まあこういうことでＩＳＩが設立されまして，1887年には第１回の総会がローマで開かれましたし，1895年には第５回の総会がベルンという所で行なわれました。これはわが明治28年にあたりますが，この時に，それからちようど５年目にあたる明治33年，西暦で申しますというと1900年という，ちようど19世紀から20世紀にかわる年でありますが，この年において世界の各国が相提携して人口センサスをやろうではないか，いわゆる今日で申しますところの世界センサス，当時は世紀センサスと呼んだ，これをやろうということをここで提案をいたしておるのであります。また明治37年には第７回の国際統計協会の総会がオスロで開かれ，この時に初めて日本代表をこの国際統計協会に送りました。これが柳沢保恵伯爵でありまして，この時以

来日本はこの国際統計協会の総会には必ず代表を送つております。ただ1つの例外がありますのは，戦後の昭和22年にワシントンで第25回の総会が開かれた時は，ちようど占領下でありまして，日本はそういう国際会議に出席することは許されなかつた，そういうことがありますけれども，この1回を除きまして，日本では毎回代表を送つておるのであります。しかも昭和5年には，今の柳沢伯爵の肝いりもあつたと思いますけれども，東京でこの国際統計協会の第19回総会が開かれております。大体この総会はヨーロツパの各国がアメリカで交互に行なわれるのが例でありますけれども，昭和5年に初めて東洋の東京で開かれるのであります。そうしてそれから30年たちました昨年，昭和35年に再び東京で第32回の総会が開かれたというわけであります。

今申しましたように，この国際統計協会が設立されましたのは75年前であります。ところが今申しますようにその設立当時においてはイギリスの統計協会がすでに50年祭を祝つたということは，同協会が今日125年の創立記念日を迎えるということを意味しますし，またパリ統計協会が当時25年祭を祝つたということは，本年がパリ統計協会の100年祭の年に当る，そういうことになるのであります。

さて先ほど申しましたボルドリーニの演説ではこのことに触れ，フランスが世界の統計界にいたしたところの貢献のうち最大のものは，いわゆる確率論を打ち樹て，そうしてそれを正しく発展させたことであるが，この貢献について，このパリ統計協会の100年祭のこの年において，しかもこのパリにおいて，回顧し，讃えることは誠に正しいことであり，かつ美しいことである，という言葉をもつて彼の演説を結んだのであります。

国際統計協会は，このように75年前にできておりますけれども，その前に，もう1つこの協会の前身というべきものがあるのであります。それは，ちようど今から110年程前に，万国統計会議というものが開かれておるのであります。これはちようど，わが嘉永年間のことでありますが，当時やはりロンドンで万国博覧会がありました時に，近世統計学の父といわれるケトレーが，万国の統計家は協同して共通の問題を話し合う必要があるということで万国統計会議を提唱し，ブラツセルでその第1回の会合を催しまして，世界の26カ国からこの会議に150人の統計家を集めたのであります。その時に，世界の各国は人口センサスを10年毎にやるようにしたいものである，こういつたようなことがすでに相談をされておるのであります。そしてそれより数年置きに欧州の各国でこの万国統計会議が開かれております。記録によりますと，第5回の会議では，有名なフローレンス・ナイチンゲールが，病院統計について講演を行なつたりしておるのであります。第8回の会議というのがペテルブルクで，明治5年になりますけれども，開かれておりまして，その時には，人口センサスを10年毎にやろうということはすでに第1回の時に話合いができていましたが，これをさらに西歴で，1番後に0のつく年，1900年，1910年，1920年，1950年，1960年といつたような0のつく年にやろうではないかというような話もできております。あるいはまた，こういう項目，こういう項目といつた人口センサスの調査項目を11ばかりあげまして，これを世界各国で調査しようではないか，こんなところまで，はやくも明治5年の，国際統計協会以前の万国統計会議の際に，相談が行なわれておる，こういつたようなことであります。

ただこの万国統計会議は実はなかなかうまくいかない点もありました。それは第1には，どうも言葉がなかなかよく通じ合わない，従つて意思の疎通ができない。今日でありますというと同時通訳というのがあります。私どもの会議におきましても，公式には英語かフランス語を使うことになつており，イヤホーンをつけますと，英語の話はフランス語に訳し，フランス語の話は英語に訳して，それが同時に耳に入つてくる，そういう仕組みになつております。私などはどつちのキイを動かしてもどうもあまりよくわからないのでありますけれども，当時はむろんそういう設備がない。従つて意思の疎通がうまくいかないということでこの万国統計会議はいつとはなしに沙汰やみになつておつたという事情であります。

いずれにいたしましても，ここに私が申したいことは統計についての国際的な協力の歴史というものは誠に古いということであります。国際統計協会は創立75年になつております。しかしその前身から数えると，もう110年になるわけであります。また，ロンドンの王立統計協会は125年の歴史をもつておる。パリ統計協会は創立後100年である，こういうふうに非常に古い歴史をもつている。一体なぜこの統計というものが，そういう協力ができるかといえば，これは御承知のように，統計というものは非常に技術的なものであつて，統計についての技術というものは，どこの国にも通用するものであります。従つてそういうように協力というものが行なわれやすい。いま1つは，統計というものは，これまた御承知のように，比較をすることによつて意味が出て参ります。自分の所だけで統計を作つてみるだけでは自分の所の立場，位置というものがはつきりいたしません。これを各国間に比較することによつて統計の意味が出てくる。そういうことがありまして，この協力機構というものが早くからできました。しかもさらに申したいことは，こういうふうな統計協力の機構というものができておつたということは，すでにその前に各国では近代統計というものが相当に発達しておつたということを前提としなければならないという点であります。

これは皆様も御承知の通りでありまして，たとえば人

口センサスのごときは，一番古いものは御承知の通りアメリカであります。アメリカでは今から170年前，1790年に，アメリカ合衆国建国早々にして，いちはやくこのことを憲法の中にうたいまして，すなわちアメリカ合衆国は，議員の定数を各州毎に定めるために，10年に1回ずつの人口センサスを行わなければならない，ということを，憲法第1条にうたつて，その第1回センサスを実施いたしました。それが170年前のことであります。またイギリスとかフランスあたりは，それから10年おくれてこのセンサスを始めております。その他の各国——たとえばオーストリアとかオランダあたりも，ほぼ140年前に始まつております。イタリーの第1回の人口センサスをいたしましたのがちようど今から100年前，1861年であります。こういう工合であります。

しかるにわが国はどうかというと，わが国におきましては，この人口センサスを実際にやりましたのが，御承知の大正9年，今からちようど40年前というわけであります。しかし，むろん統計活動としては，もう少し前から各種の事業が始まつておるのであります。

そのへんをこれからちよつと回顧してみたいと思いますが，たとえば先般通産省におきましては，工業統計の50周年を祝われました——ということは明治42年に工業統計の規則ができまして，そして現在の形の近代的な工業統計というものを50年前に始めた，こういうことになるわけであります。もちろん，いずれにいたしましても日本の統計の歴史は，欧米の統計の歴史に比べてみますというと，まだまだ浅い。しかしながら一面から申しますというと，日本の統計というものも，それなりにかなり古い歴史を持つということがいえるのであります。

そこでひるがえりまして，幕末に浦賀の港に黒船に乗つて，アメリカの提督ペルリがやつて参りましたのが，嘉永6年のことであります。それから3年ばかり経ちまして安政3年にアメリカの総領事ハリスがやつて参りました。そして日米修好通商条約というものを締結いたしました。たしか数年前にこの日米修好通商条約百年ということで，日米各国でいろいろな記念の行事が行なわれたのであります。わが皇太子殿下御夫妻がアメリカにおいでになりましたのも，この日米修好通商条約百年の記念行事の一つとしておいでになつたように伺つております。このハリスが日本に来たときに，こういうことを言つたということが伝えられておるのであります。どういうことかと申しますと，「どうもこの国には新聞と統計がない。それでよく政治ができるものだ。」というのであります。これはなかなか意味の深い言葉であります。なるほどその当時におきましては，日本には，新聞といえるもの，あるいは統計といえるものはまだなかつた，ところが欧米にはすでにそれがあつたのであります。新聞については今日は深くは触れませんけれども，たとえば今日なお世界的な新聞として続いておりますところのイギリスのタイムズという新聞はちようど今から170年前に創刊されておるのであります。わが国はどうかと申しますというと，今の朝日新聞の前身である大阪朝日新聞が創刊されましたのがちようど今から80年前であります。統計につきましては今申し上げた通りでございまして，人口センサスは，欧米各国ではすでにもう170年も前から少くとも100年以上前からやつておるというような次第であります。

このハリスが申しました言葉というものをよく考えてみますというと，これはなかなか含蓄がある意味の深い言葉であります。つまりその頃はやくも欧米では新聞と統計を政治の用具に使つておつたということを意味しております。欧米におきましては，新聞と統計を用具として，いわゆる近代政治を行なう，こういう段階になつておつたということであります。この新聞と統計というものは，これを別の言葉で申しますというと，世論と数字というふうにいうことができる。欧米は，すでにハリスが来たときには，もう世論と数字に基いて政治を行なつておつた，日本ではそういうやり方をしておらない，それで政治がよくできるものだ，こういうふうに言つたように考えられるのであります。数字を用いて政治をするということはどういうことかというと，これは結局，合理的な実証的な政治の仕方をしておる，こういうことであります。つまり合理主義，実証主義というものは，必然的にデーターを要求いたします。データーを重ね，あるいは経験を積んで，そのことから物事を帰納的に考える，こういうやり方をするのが，合理的，実証的な政治であります。欧米においてはこういう政治をやつておる，つまり考えればこれらのヨーロツパの国々というのは，すでにいろいろな形の近代革命というものを経験をしまして，そうして近代国家に脱皮しておる。たとえば，イギリスでは名誉革命とか，清教徒革命といつたようなものをいちはやく経験をいたしました。アメリカでは独立戦争をいたしました。フランスでは御承知のように大革命を経験いたしました。そういつたいろいろな試練を経てそして近代革命を遂げて，そして近代国家というものに移り変つておつた，そういうふうであつたればこそ，合理主義，実証主義的な政治の仕方に移り変つておつた。従つてデーターを基礎とし，いわゆる新聞と統計を基礎とする政治を始めておつたということがいえるのであります。

さて日本はどうであつたかというと，長い間鎖国をいたしておりまして，日本は世界の各国の大勢から離れておりました。いわゆる前近代の状態にあつたのがそのころの日本であります。砲声一発，浦賀に黒船がやつて参りまして，日本に対して開国と通商を迫つたのは，まさにその近代の夜明けが日本に訪れようとしておつた頃の

ことであります。日本近代化のきつかけを作つたものがその黒船であつたということがいえると思う。このときを契機といたしまして，日本には志士，先覚者が続々と立ち上りまして，いわゆる明治維新の大業をなし遂げたのであります。そして近代国家への一歩を踏み出したのであります。このころ，この多くの先覚者の中の一人に今日私たちが統計学の祖と仰いでおりますところの杉亨二先生がおられたのであります。杉亨二先生は長崎の人でありまして，はやく蘭学を学び，ちようどそのころは蕃書調所と申しまして，これは後に開成校となり，東京帝国大学となり，今日の東京大学となつてまいつた学校でありますが，そこの教授手伝い，まあ助教授でありますが，そういう仕事をしておられた。先生の仕事は何かというと，オランダからくる週間誌の「ロツテルダム・コーランド」というのを読んで，その中でおもしろいところを翻訳してこれを閣老の閲覧に供するという仕事であつた。ところがあるときに，ドイツのバイエルンの教育のことを書いたものがあつた。100人の中に読み書き算術のできるものが何人，できないものが何人，こう書いてある，どうもこれはやはり日本にとつても有用なものであろう，こう考えたのが自分が統計に目を開いた初めである。こういうふうに申しておられる。間もなく，オランダの統計年鑑が入つてきまして，それを見ると，人口のことが書いてある，100人のうち男が何分何厘，女が何分何厘と書いてある，どうも人間が何分何厘とは妙な調べだと思つたが，はて，これがつまりいつか見たバイエルンの教育のことと同じようなものだと思つて，また一つ統計に対しての目を開いていつた，こういうことが自叙伝に書いてあるのであります。

そのうちに，日本の最初の留学生であつた津田真道，西周こういう人たちがオランダから帰つて参りました。そのときに両人が習つた先生のフセリングという人の統計の本を持つて帰つて参りました。のちに津田真道はこの本を翻訳しまして一般に出しました。先般統計局で開かれた統計展示会に展示された古い本の一つに，この本が陳列されてありました。そういうものを，やはり杉先生がいちはやく読んで，ますます統計への目を開いていかれたのであります。そのうちに徳川幕府が瓦解しまして，杉先生は徳川幕府に従つて駿河国に移住をいたしました。ここで政治をするのに何を土台にしていいかわからない。そもそも領内の事実を知らずして政治を行なつても，労のみ多くして効果がない，ここが統計の活用しどころだ，こう考えて，奉行に進言して，人口調査をいたしました。今日の世帯表に当る家別表を各名主を通して各戸に配付しまして人口の調べをした。これが日本における人口調査の初めであるといわれております。

ところで駿河国におりましたころの杉翁は，時の明治政府にひとつの建白をいたしたのであります。およそ天下の事実というものは，これはすべて政表の上に明らかにうつさなければならない，政表と言えば，今日に言う統計の意味でありますが，天下のことはすべて統計の上に表わさなければならないという建言を明治政府にいたしました。明治政府はこの建言をいれまして，明治4年に太政官の正院の中に政表課を置きまして，しかもこの建白をいたした当の本人である杉翁を駿河国から呼び寄せまして，そしてこの政表課の責任者としたのであります。これが後の内閣統計局になり，今日の統計局に及んでおるのでありますが，本年はその明治4年に政表課が設置されて以来ちようど90年になるということで，統計局では90年記念の式典を先般も行なつたのであります。このように統計をもつて政治の方策としなければならないということを建言したこの杉翁も偉いのでありますがこれを用いて維新早々の際に統計専管のそういう課を置いたという明治政府の勇断もまことに偉いと私は感ずるのであります。

そうこういたしまして，この政表課には，杉翁の下に若い俊秀の人々がたくさん集まつた，そして勉強いたしまして，当時この太政官政表課というのは，これは太政官の中の大学であるという評判が立つたというくらいであります。そしてこの連中が一番考えましたことは，センサスを何とかして早急に実施したいということで，まずもつてその手初めに山梨県でこの人口調査を行なうことになつた。そこで明治12年に甲斐国現在人別調査を行なつたのであります。このときには，先ほどちよつと申しましたけれども，明治5年のペテルブルクの万国統計会議で協定をいたしたところの11の項目をほとんど全部を取り入れたのでありまして，今日におきましても，この甲斐国人別調の結果は大へんに高い評価を受けておるのであります。

そのうち先ほども申しました明治28年に，国際統計協会の総会の第5回というのがベルンで開かれまして，そのときに世紀センサス，つまり各国政府は1900年を期して一斉に世界センサスをやろうではないか，こういう申し出がありまして，そして日本の国論は沸騰しました。しかしこれは結局は間に合いませんでしたけれども，明治35年に「国勢調査に関する法律」が通つた，そしてその実施は延びに延びまして，大正9年になつて初めて第1回の国勢調査が実施されたという事情は御承知のとおりであります。

そこで話がもとに戻りますけれども，いまひとつ，明治4年に政表課という統計専管の部局をおいて最初に何をやつたかという点であります。センサスの準備をいたしたことは当然でありますけれども，まずはじめに行なわれたことは各行政統計の編集事業でありまして，明治5年には早くも第1回の年鑑ができております。これを辛未政表と申します。ついで翌年には壬申政表ができま

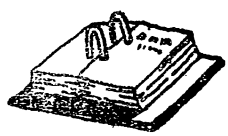
して，その後は毎年日本政表としてこういう形の年鑑を作るようになつたのであります。また明治５年には戸籍調査をいたしました。そしていわゆる戸籍人口を詳細に積みあげたのであります。この明治５年の戸籍人口が基礎となりまして，その後，年々その人口の推計が行われるようになつたのであります。さらにはまた明治３年には，物産表という形で，当時の民部省によつて物産調査が行われました。実は工業統計の50年ということを申されておりますけれども，工業統計の芽生えはすでに明治３年のこの調査にあつたということもいえるのであります。このようにいたしまして，人口，生産，経済あるいは物価の関係につきましても，もう明治初年からいろいろと統計活動が行われてきたのであます。

大正期に入りますと，これに加わりまして社会統計，労働統計――労働問題が起つて参りますのと相応いたしまして，そういうものもだんだん芽生えてきたのであります。

私はここでこういうことを申したい。日本が明治維新において近代国家としての第一歩を踏み出したそのときにおいて，すでに統計についてのやはり第一歩が踏み出された，そして日本の近代化というものがだんだんと進んで参りますにつれて統計も進んできた，あるいは逆にいつてもいいかもしれない，統計が進むとともに日本の近代化というものは促進されてきたということがいえるかもしれません。従つてまた，日本の近代化が何かの事情で停滞をしたときは統計も歩みをとめておる，こういうことができるのではないか。たとえば戦争中であります，戦争中におきましては，日本の統計は公表を禁じられるものが多かつた，公表を禁じられるというと統計は進歩しない，あるいは統計技術の面におきましても，外国の新らしい進んだそういうものが入つてこない，こういうことになりますというと，日本の統計は非常におくれるのであります。そして，そういうときには日本の近代化の歩みというものも停滞をしておつたということがいえると思うのであります。

そこで大きな犠牲を払つた戦争が済みますと同時に，日本は今まで残つておりました前近代的な残滓を一挙に押し流してしまいまして，名実ともに近代国家として内容と体裁を整えるようになりました。そのことと符節を合するように，相応するように日本の統計というものも一時に花が咲いたのであります。つまり日本の統計は戦後において，先ほどの話にたびたびありましたけれども格段の進歩を遂げたのであります。しかもその基盤は終戦までの75年間の統計界の先人の努力というか偉業があつたということは讃えられなければならないと思う，そしてこの偉業の上に，戦後撩乱として統計の花が一時に咲いたということがいえると思うのであります。

私は占領行政の統計に対する置きみやげというものを高く評価したいのであります。占領行政につきましてはいろいろと批判もあろうと思いますけれども，この統計を使つて，データーに基いて行政をやる，仕事をやる，政治をやるという，こういうことを教え，そういう習慣を日本人につけたということは，これはひとつの大きな占領軍当局の功績であつたというふうに思います。

今日においては，一面においては新らしい技術が入りあるいは新らしい数理理論，新らしい標本理論が入つてきたり，あるいは進んだ統計機械が入つて参りまして，日本の統計は今日においては非常な発展を遂げております。また他方においては統計を利用するという風潮，これも先ほど来お話があつた通りでありますが，今日におきましては，統計を使つて，そして統計を基礎として政治を論じ，政策を論じ，あるいは行政を行ない，あるいは事業を経営するという，こういう風潮はかつて見られなかつたほどにまで進んで参つたのであります。

私は「新聞と統計がなくてよく政治ができるものだ」とのハリスの言葉を想い浮かべながら話を進めて参りました。新聞については申し上げませんでしたけれども――また申し上げる材料を持つておりませんけれども，たとえば新聞週間というものがあります。今年度の新聞週間の標語を見てみますというと，「新聞は動く社会の正しい目」というのであります。つまり社会は絶えず流動しておる，その流動しておる社会を掴んでいく眼力といいますか，正しく掴んでいくためには正しい目が必要である，それが新聞であり報道であるとしておるのでありますけれども，私はその言葉をそつくり統計にちようだいしたい。動く社会を正しく掴むところの目は新聞と共にまさしく統計である。今日の近代国家としての日本の歩みの上に統計が大きな働きをしておる，そのことが今日より大きいことはない，こういうときにおいて，動く社会を正しくとらえていくところの目であるところの統計の使命というものを十分に自覚したい。そしてこの統計がまさに90年を迎えるに当り，また本年のこの茨城県統計大会に皆様のお集まりいただきましたこの機会において，もう一度統計の使命というものをよく考え，そしてこの使命のために邁進いたしたいということをこの席よりお願い申し上げまして，私の拙ない講演を終ります。ありがとうございました。（拍手）